

先週私たちは、コリントにおけるパウロの宣教について見ました。会堂で「イエスがキリストである」とはっきりと宣言したパウロに対して、ユダヤ人たちは反抗し、暴言を吐いたわけですが、でも同時に、会堂管理者クリスポとその一家、また多くのコリント人が、主を信じてバプテスマを受けます。その後、実に一年半もの間、パウロはそこに留まって、みことばを教え続けるわけですが、彼をそのように導いたのは、主ご自身でした。主が、幻を通してパウロに語られることで、彼が主の御心を知ったからです。

復習もかねて、その幻の内容をもう一度見ておきます。9-10 節「ある夜、主は幻によってパウロに、『恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。10 わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから』と言われた」。この時、パウロに示された主の御心とは、彼をして恐れずに、語り続ける、というものでした。それによって神様の民がみことばを聞き、救われるためです。主は彼に二つのことを約束されました。一つは、ご自分が共におられること、そしてもう一つは、だれもコリントにおいて彼を襲って、危害を加える者はないということです。

では、その主の約束は守られたのでしょうか？12-13 節「ところが、ガリオがアカヤの地方総督であったとき、ユダヤ人たちはこぞってパウロに反抗し、彼を法廷に引いて行って、13『この人は、律法にそむいて神を拝むことを、人々に説き勧めています』と訴えた」。「だれもあなたを襲って、危害を加える者はない」と主は言われましたが、ガリオ（前3年頃～紀元65年）が、アカヤ地方の総督（紀元51年～）であったとき、ユダヤ人たちはこぞってパウロに反抗し、彼を法廷に引いて行くのです。このことをして、パウロはすでに「襲われた」とも言えるかもしれませんが、どうやらこの時に、危害を加えられることはなかったようです。

ユダヤ人たちとしては、もちろん、そのつもりでパウロを法廷に引いて行ったと思います。少なくとも、コリントでみことばを語ることを止めさせようとしたことでしょう。ところが、14-16 節「パウロが口を開こうとすると、ガリオはユダヤ人に向かってこう言った。『ユダヤ人の諸君。不正事件や悪質な犯罪のことであれば、私は当然、あなたがたの訴えを取り上げましょうが、15 あなたがたの、ことばや名称や律法に関する問題であるなら、自分たちで始末をつけるのがよかろう。私はそのようなことの裁判官にはなりたくない。』16 こうして、彼らを法廷から追い出した」。

ユダヤ人たちの企みは、計らずも自分たちが訴え出た地方総督ガリオによって退けられます。ガリオ的には、何も特別パウロを擁護するつもりはなかったかも知れません。ただ、この訴えをローマの法律に違反するものではなく、ユダヤ教の中の問題とすることで、彼はユダヤ人たちを退けたのでしょう。ちなみに、この時、キリスト教は、このような形で守られたわけですが、この十数年後には、ローマからも迫害を受けるようになります。そういうことを考えると、主の約束が真実であったことがわかります。

では、そのような形で自分たちの訴えが退けられ、法廷から追い出されたユダヤ人たちは、それで黙って退散したのでしょうか？そんなはずがありません。17 節「そこで、みなのは、会堂管理者ソステネを捕らえ、法廷の前で打ちたたいた。ガリオは、そのようなことは少しも気にしなかった」。法廷を追い出されたユダヤ人たちは、その腹いせとして、会堂管理者ソステネを捕らえて、隠れた所ではなく、法廷の前で彼を打ちたたきました。彼らは、なぜパウロではなく、ソステネを打ち叩いたのでしょうか？

おそらく同一人物と思われるのですが、コリント第一の手紙の最初に「ソステネ」と出てきますので、もしかしたら、彼はこの時すでにコリント教会のメンバーであったのかもしれませんが。もしくは、この訴えが失敗に終わったため、それを率先した会堂管理者のソステネに、ユダヤ人たちの怒りの矢先が向けられることで、彼は打ちたたかれ、その後、彼も信仰に入ったことも考えられます。

またパウロはローマ市民でしたから、彼に手をかけるなら、それこそローマ法によって犯罪として裁かれることになりすから、それを恐れて、ユダヤ人たちは、パウロではなく、他の人を打つことでパウロを苦しめようとしたのかもしれませんが。いずれにしろ、この時、パウロは危害を受けずに済んだのです。そういう意味で、彼に対する神様の約束は守られました。もちろん、それで良かった、ということでもないのですが…。

パウロは、その後「すぐ」ではなく、なお長らく滞在してから、コリントを去りますが、その時期についてはどのように判断したのでしょうか？つまり、前回の箇所には、それが「一年半」であったとありますが、パウロをして、彼はコリントを去る日をどのように決断したのでしょうか？主が再び幻を通して、「次のところに行きなさい」と語られたからですか？そうだったらわかりやすかったのですが、その説明はありません。

ただ18節のことばの中に、そのヒントを見ることができると思うのです。「パウロは、なお長らく滞在してから、兄弟たちに別れを告げて、シリアへ向けて出帆した。…」どうぞ前の地図を見て下さい。この後、パウロは、ケンクレヤ（コリントの東11キロ）に行き、そこから船でエペソに行き、さらにカイザリヤに上陸した後は、エルサレムを経て、シリアのアンテオケに行ったわけですが、この時の目的地はシリアであったことが記されているのです。つまり、パウロの心には、シリアに行くことが示されていました。それゆえに、彼がそのことを主の御心として受け止めていた、といえるでしょう。

ちなみに、パウロは、ケンクレヤで髪をそりましたが、それはこの時彼が立てていた一つの誓願、つまり、民数記6章1-21節に記されているナジル人の誓願のためでした。ナジル人というのは、神にきよめ別れた人という意味で、特定の期間中、自らを主にささげ聖別することの誓いを髪をそらないという形で表現したのです。その誓いの内容についてはわかりませんが、先週見たように、パウロはコリントで弱さや恐れを覚えていたとありましたから、そのことと何らかの関係があったことが考えられます。いずれにしても、テモテの割礼の時のように、パウロは、それが福音の本質にかかわらない限り、ユダヤ人の生活儀式などを用いることで、それを彼らに対する証としていたこともあったようです。

では、先ほどのパウロをして、「彼がシリアへ行くことを主の御心として受け止めていた」ということに話を戻しますが、私がそういうのは、19-21節の中のパウロの言葉からです。「彼らがエペソに着くと、パウロはふたりをそこに残し、自分だけ会堂に入って、ユダヤ人たちと論じた。20人々は、もっと長くどまるように頼んだが、彼は聞き入れないで、21『神のみこころなら、またあなたがたのところへ帰って来ます』と言って別れを告げ、エペソから船出した」。

パウロがエペソの会堂でみことばを語った時、人々の反応は、決して悪いものではありませんでした。むしろ、それは良いものだったのです。というのも、人々は、もっと長くどまるよう彼に頼んだからです。でも、パウロは、「神のみこころなら、またあなたがたのところへ帰って来ます」といってそれを退けました。皆さん、なぜパウロは、そのようなチャンス自ら逃したのでしょうか？エペソとは、アジア州の州都のことですが、パウロたちがアケドニヤに渡る前、それこそ彼らはアジアでみことばを語ろうとしました。でも、その時は、主の御霊によって禁じられたのです。

ところが、この時は、すでにエペソの地において、しかも会堂でみことばを語った時、人々はもっと聞かせてほしいとパウロに頼んだほどです。それなのに、なぜ彼はそのような絶好のチャンスを退けてしまったのか？それは、すでに見たように、パウロのうちにエペソに留まることは別のことが主の御心として示されていたからです。つまり、シリアに行くこと、その途中でエルサレムに上り、そして、自分を送り出してくれたシリアのアンテオケ教会に行くことが、彼のうちに御心として示されていたからです。

私たちとして、主イエスを証すること、福音を語ることがどんな時にも変わらない主の御心として受け止めることで、それをパウロの状況にもあてはめて、主の御心は、目の前にいる人々に福音を語ることだと考えてしまうかも知れません。特に、この時のエペソの人々のように、お願いされたら、断つてはいけないと思ってしまうことがあるでしょう。また、ある時には、福音に対して全く心が開かれていない人に対して、「みことばを語らない」といって強引にみことばを語ることがあるかも知れません。

でも、ここでパウロから教えられること、それは神様のみこころを第一とする、ということではないでしょうか？つまり、時や状況がどうであれ、主の変わることはない御心としては、人々に福音が宣べ伝えられることですが、でもだからといって、すべての必要を一度に満たすことは到底不可能なことです。23節を見るとこうあります。「そこにしばらくいてから、彼はまた出発し、ガラテヤの地方およびフルギヤを次々に巡って、すべての弟子たちを力づけた」。

パウロは、エペソの人々のことだけでなく、これまで信仰をもったすべての人のことをいつも心に掛けていました。諸教会のために祈り、彼らを巡回し、みことばによって力づけることを重荷としていたのです。それゆえに、この時、彼はエペソにはとどまらなかった。でも、再び彼が伝道旅行に出た時、つまり、今日の箇所です。第二次伝道旅行を終え、その後、彼は第三次伝道旅行に行くわけですが、その時には、エペソに行き、約三年間、そこで宣教の働きをします。それを主のみこころだと受けとめていたからです。

私たちをして、主のみこころは、みことばに聴くことなしに、また祈りをもって主に尋ねることなしに、わかるものではありません。人の常識、理屈をもってきて、それを「主のみこころ」ということはできないのです。それゆえに、他者からすると、「本当にそうか？」と思えることがあるかも知れません。「あなたの思い込みじゃないの？」と言われることもあると思うのです。でも、主のみこころが、いつでも私たち人間に理解できるものかという、決してそうとは言えません。その証拠が、主イエスの十字架の死と復活です。

預言者イザヤを代表として、神様は、救い主の受難と贖いの死について語っておられました。また復活についても、聖書を通して語っておられたのです。でも、弟子たちを含め、当時のどれだけの人が、そのことを神様の御心として受けとめていましたか？ほぼゼロです。でも、主イエス自身はご存知だった。罪人である私たちのため、ご自分が苦しみを受け、十字架の贖いの死を遂げることで、救いの道が備えられることを主は知っていました。そのためにこそ、父なる神様に遣わされてこの世に来られたことを知っておられたのです。

ですから、たとえ弟子が反対しようが、悪魔が誘惑しようが、主はそれを退けて、自ら十字架の杯を飲まれた。そして三日目によみがえられたのです。主がそのようにして救いのわざを成し遂げて下さったので、罪の赦しと永遠のいのちが、恵みとして今日私たちに与えられているのです。主は、あなたにどんなことを御心として示しておられますか？あなたは、自分の心の欲することを聞くより、主は私に何を求めておられるのか、私を通して主はどんなことをされようとしているかと、主の御心を求めておられるでしょうか？

「主は、私にこのようなことを示しておられます。でも、それをする力と勇気がありません」とおっしゃる方がいますか？どうかゲッセマネの園で、主がどのように祈られたかを思い出して下さい。主は血のような汗を流しながら、「わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください」と父なる神様に切に祈られました。「すると、御使いが天から現われて、イエスを力づけた」(ルカ 22:43)のです。みことばと祈りを通してご自分に近づく者に、主はみこころを示すだけでなく、聖霊によってそれを行わせて下さいます。そして、そのような歩みこそ、主が私たちに求めておられるものであり、私たちとしても、そのような主との歩みを通して、いよいよ主のすばらしさを味わい知るようにされるのです。みこころを求めて、主に近づこうではありませんか。